機動武闘伝Ｇガンダム×ＩＳ（仮）

超兵Ｂ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動武闘伝Ｇガンダム×ＩＳ（仮）

【Ｎコード】
Ｎ７００６Ｙ

【作者名】
超兵Ｂ

【あらすじ】
試験的運用となります。
作者自体は原作は漫画とちょっとのアニメしか知らないため、キャラの特徴などもうまく掴めず、今後どうなるか分かりませんが、楽しんでいただけたら幸いです。

マスターアジア暁に死す！！（前書き）

今後連載自体がどうなるか分かりませんがよろしくお願いします。

マスターアジア暁に死す！！

「……美しいな……」

「……はい！！　とても美しゅうございます！！」

「ならば……！！」

「流派！！　東方不敗は！！！」

「王者の風よ！！！」

「全新！！！」

「系裂！！！」

「天破侠乱！！！」

「「見よ！！　東方は、赤く燃えているぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！！
！！」」

「……！！」

「……師匠……？師匠……師匠…………　師ぃぃ匠ぉぉぉぉ
ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

マスターアジアこと、シュウジ・クロスの激動の生涯は、こうして弟子であるドモンに看取られながら静かに幕を閉じてゆくのだった。

マスターアジア逝く。

……

そして、物語は別の世界へと移り変わって行く。

世界を超えて紡がれる新たな物語の結末は如何になるのか‥。

クラスメイトは全員女で・・（前書き）

原作沿いです！

最後のほう変ですが楽しんでいただけたら幸いです！

クラスメイトは全員女で‥

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

カッカッカッとチョークと黒板が当たる音が鳴り響く。

「はいっ　副担任の山田真耶です　みなさん　一年間よろしくお願いしますね」

くるっと向きを変え自己紹介をする小柄な女性。

「あっ　上から読んでも下から読んでも‥やまだまや‥ですけど、からかっちゃダメですよ」

「は～い！！」

ほんわかとした雰囲気を醸し出す彼女は、冗談も交えながらニコッと笑うと挨拶を終わらす。

彼女の言葉に生徒達も元気よく笑顔で返事をする。

「えっと　じゃあ最初のＳＨＲは、皆さんに自己紹介をしてもらいましょう」

パラパラと名簿をめくり覗き込む真耶。

「では、あいうえお順からやってもらおうかな？　えっと、じゃあ最初の人お願いします」

「は〜い」

元気な声と共に女子生徒が自己紹介を始めた。

〜〜〜

「はい！　ありがとうございます」

女子生徒の自己紹介が終わり、次は『お』から始まる生徒の番となっていた。

「織斑君お願いします」

織斑君と呼ばれた生徒は頭を抱え俯いている。

「えっと、織斑君？自己紹介をお願いします」

真耶が声をかけるが一向に返事がない。

「織斑一夏君」

真耶は本人の席まで近づくとずいっと顔を寄せ名前を呼んだ。

「はっはいっ！」

「ひゃっ」

ようやく聞こえたのか慌てて席から立ち上がった一夏。
突然の行動に驚き怯える真耶。
「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい　お、怒ってるよね？　怒ってるかな？　ゴメンね　ゴメンね！」
真耶は相手を怒らせてしまったと思い、早口で謝罪を口にする。
「でもね、あのね　自己紹介って『あ』から始まって、今『お』の織斑君なんだよね」
必死に説明しようとする真耶。
「いや、あの、そんなに謝らなくても…　分かってますし　自己紹介しますから」
「ほ…本当ですか？」
目尻に涙を浮かべ、グスッと鼻を鳴らし、遠慮がちに聞く真耶。
焦りながらワタワタと手を動かす一夏。
その時教室の扉を開け、中に入ってきた人物がいた。
「新学期早々騒々しいぞ　織斑」
「へ？」

突然名前を呼ばれたことに間の抜けた返事をする一夏。

教室に入ってきたのは黒いスーツにタイトなスカートを着こなし、黒いストッキングを履いた、手には出席簿を持った一人の女性。

織斑一夏の姉、織斑千冬であった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

千冬の突然の登場に教室全体が静まり返る。

「聞いているのか織斑一夏」

「なっ！……んで…」

弟の一夏も、あまりの驚きに上手く言葉が出てこない。

「あ、織斑先生　もう会議は終わられたんですか？」

「えっ！？」

「あぁ、山田先生　クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

真耶と千冬が親しげに話す様子を見て驚く一夏。

そんな一夏に目もくれず教卓の前に立つと、生徒に向かい挨拶をはじめとする。

「諸君　私が織斑千冬だ　君たち新人を、一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ」

千冬の言葉に静かに耳を傾け聞く女子生徒達。

「出来ない者には出来るまで指導してやる　逆らっても良いが、私の言うことは聞け　必ずだ、いいな」

厳し目だが、静かにハッキリと生徒達にに言う千冬。

千冬の厳しい言動に、それを聞いていた女子生徒達は言葉を失った…

「……き…」

かに見えた。

「キャーーーーー千冬様　本物の千冬様よ！」

「美しすぎます！」

「愛してます！」

「恐れ多くてお顔を見れません！！」

女子生徒達の黄色い声援が木霊し、教室内が大変な騒ぎになっている。

「ずっとファンでした！」

「お姉様に憧れてこの学園に入学を決めたんです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！！」

女子生徒達は皆、口々に好き勝手なことを言い始めている。

「……毎年　よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ、感心させられる　それとも私のクラスにだけ集中させているのか？」

「アハハハ…」

はぁとため息を吐き、呆れたように言う千冬。

真耶もそんな千冬を見て愛想笑いを返すのだった。

「キャァァァァ！！　もっと罵って！」

「ハァハァ　私、もう駄目…」

「はぁ…」

千冬は再度ため息をつき、真耶もその光景を見て冷や汗をかいている。

「まぁいい　織斑、続けろ」

千冬は考えるのを諦めたのか、女子生徒達をそのままに放置し、一夏に自己紹介の続きを促した。

「えっ？　あぁ…」

千冬に言われ、生徒達の方へと向き直り改めて自己紹介をしようとする。

「う゛…」

注目されているのか、皆期待するかのように一様に視線が一夏へと注がれる。

「えー　えっと織斑一夏です　今後ともよろしくお願いします」

一夏は多少たじろぎながらも挨拶を終わらす。

「あれ？」

ぐるりと教室内を見渡す一夏。

一夏の視線の先には、ブロンドのお嬢様のような生徒や黒髪の女子生徒などが目に映った。

その中で黒髪をリボンで結んだポニーテールの一人の女子生徒が一夏の目に止まった。

「箒？」

知っている顔があったため、一瞬呆けてしまった一夏。

そのため、自分に近づいている危険に反応が遅れた。

「お前は、自己紹介もまともにできんのか…　馬鹿者」

「痛っ！？」

パァンと気持ちのいいほど鳴り響いた出席簿を叩きつけられたら一夏の頭。

「いや千冬姉…　俺は…」

「学校では織斑先生と呼べ」

またも叩かれる一夏。

「…はい　織斑先生…」

あまりの痛みにうずくまる一夏であった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「さぁ！！　ＳＨＲは終わりだ　諸君らにはこれから、ＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう！！」

バンッと名簿を教卓に叩きつけ生徒達にこれからの方針を話して行く。

生徒達は皆真剣な眼差しで千冬を見、その言葉に耳を傾けている。

「その後、実習だが　基本操作は半月で体に染みこませろ　絶対にだ」

(なんという鬼教官なんだ　俺の姉は、人の皮をかぶった悪魔なのだろうか　いや悪魔なのだろう)

一夏は頭を叩かれて座り込んだまま理不尽な物言いをする千冬をジ

ト目で睨みつけるように見つめた。

「いいか　良いなら返事をしろ　よくなくても返事をしろ　私の言葉には返事をしろ　貴様らに拒否権はない　わかったな」

「はい！！」

教室の生徒全員が千冬の言葉にハッキリとした声で返事をした。

「席に着け、この馬鹿者」

千冬は未だに座り込んでいる一夏を一瞥すると、そう一言言い放った。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ＳＨＲが終わり、千冬は改めて生徒達に向き直るとこう口を開いた。

「さて　最後にもう一人、おまえ達に紹介しておかなければならない人がもう一人いる　入ってきて下さい」

千冬の言葉にガラッと教室の扉を開き、緑色の長髪を後ろで結んで三つ編みにして、腕を後ろに組み、藍色の中国拳法の胴着の様なものに、黒いカンフーパンツを身につけた若い一人の男性が入ってきた。

見知らぬ男性が教室に入ってきたことに生徒達がざわめきだつ。

「静かにしろ　皆も知っていると思うが、そこの織斑と同じ様に世界で『一番目』にＩＳを動かした男性であり、これからお前達を指

導して下さる先生だ」
そんな生徒達を鎮め男性を呼び寄せた。
男性は千冬の側まで行くと、くるりと生徒達の方へ向き直り口を開いた。
「これから三年間、お前達をＩＳ操縦者として指導して行くシュウジ・クロスだ　生半可な覚悟の者は容赦なく置いて行くので覚悟するように」
睨みつけるように鋭い眼光を女子生徒達に向けると、そう言い放ったシュウジ・クロス。
その視線と雰囲気に呑まれ、睨まれた生徒達は千冬の時には見せなかった怯えた表情を浮かべる。
「ちなみに言っておくが、クロス先生は私より厳しいからな　お前達覚悟しておけよ」
千冬の言葉に生徒達全員は、今にも泣き出しそうな表情を浮かべていた。
「ではこの後は実戦で使用する装備の特性を説明する　それまで各自休んでおくように」
そう言い終わると千冬、真耶、シュウジは揃って教室を後にするのだった。
後に残された生徒達はコレからのことを考えているのか皆暗い顔をしている。

ただ一人一夏を覗いては。

「（俺と同じ、男のＩＳ操縦者）」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

異世界にて、その生涯に幕を閉じたシュウジ・クロスこと東方不敗マスター・アジア。

新たな生をこの世界で受けた彼は、この世界にてどの様な物語りを紡いでいくのであろうか：

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

クラス代表決定戦？の前に（前書き）

遅れてすいませんでした！

本当なら二日おきにあげる予定だったのですが、さらに二日もかかってしまいました

内容は原作沿いに、少しイジった感じです

最後の方でまさかの展開が？

楽しんでいただけたら幸いです！

後書きにネタ書きますのでよろしかったらどうぞ！

クラス代表決定戦？の前に

ざわざわとざわめき立つ女子生徒が遠巻きに一人の生徒を眺めている。

「はぁ」

一夏はそんな状況にため息をついていた。

（あぁもう誰か助けてくれ…）

女性しか居ないはずのＩＳ学園に男がいると言う現状は、当然ながら嫌でも注目が集まるわけで当然ながら好奇の目線もかなり向けられている。

そんなため息をついている一夏の下に、一人の女子生徒が近づいてきた。

「一夏、ちょっと良いか　話がある」

その声に顔を向けると、そこにいたのは

「箒？」

「……」

そこに居たのは、腕を組み若干頬を染めながら、無言で一夏を睨むように見つめている幼なじみの篠ノ之箒であった。

「こい」

その一言だけ言うと踵を返し教室の外へと歩き出す。

「なんだ話って」

無言で歩いて行く箒を追いかけ教室を後にする一夏。

「なぁおい」

「いいから早くしろ」

「お…おう」

声をかけてもスタスタと歩き続ける箒を見て、若干たじろぐ一夏。

一夏は言われたとおり黙って教室を後にした。

そして教室に残ったのは、そんな二人を遠巻きに見ていた、羨ましそうな顔や残念そうな声を上げている女子生徒達だった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ふー」

教室から出た一夏達は廊下の掲示板の前で立ち止まった。

「…」

一夏は掲示板のかかっている壁に背を預けると、軽く息を吐いた。
そんな一夏を無言で見つめる箒。
そんな箒に一夏の方から口を開いた。
「久しぶりだな箒」
「えっ？」
一夏の言葉がよほど予想外だったのか、箒は惚けたように、間の抜けた返事を返す。
「小学校四年生以来だから、６年ぶりだよな　すぐ箒ってわかったぞ　髪型、昔と同じだしな」
一夏は自分の頭を指し、箒の顔を見た。
「……　よく、覚えているものだな」
顔を赤らめ目を逸らしながら髪を触る箒。
「そりゃ覚えてるって」
「…」
「（うっ　睨まれた）」
腕を組み無言で一夏を睨む箒。

「（6年の歳月は、こうも人を変えるのか）」

ふぅ、とまた軽くため息を吐く一夏。

「（いや　箒は昔からこんな感じだったな）」

一夏の脳裏には、剣道着を身に付け手には竹刀を持った、目ツキの悪い今と同じく変わらぬポニーテールの箒が蘇っていた。

「そういえば　去年、剣道の全国大会で優勝したってな　おめでとう」

「なっ　なんでそんなこと知っているんだ！？」

「なんでって　新聞で見たし」

驚く箒の言葉に冷静に答える一夏。

「引っ越ししてそれ以来だったけど、親父さんは元気か？　あと：束さんも」

一夏が発したある人物の名前に目を見開く箒。

「……あの人は…私とは、関係ない…」

ギリッと苦虫を噛み潰したような表情をし、顔を背けながら左腕とスカートの裾をギュッと掴む箒。

「？　束さんと…何かあったのか？」

そんな箒の態度に不思議そうな顔をし理由を聞こうとしたが、その時ちょうど次の授業を告げる予鈴が鳴り始めた。

「時間だ、戻るぞ」

「あっ　おい！！」

呼び止めようと手を伸ばす一夏だが、箒は無理やり切り上げるようにプイッと背を向けると、振り返ることもなく一夏を残し、教室に戻っていった。

「……なんなんだ、あいつ」

そして残されたのは、所在なげに手を伸ばしたまま呆然と立ち尽くす一夏一人だけであった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

授業が始まり、千冬は教卓の前で手に持った手帳に目線を落としながら淡々て授業を進行していた。

「それでは　この時間は、実戦に使用する各種装備の特性について説明を……

ああ、その前に　再来週のクラス対抗戦に出場する代表者を決めないといけないいな」

手帳を見ていた千冬は、来週開催されるクラス対抗戦の選手決めを口にした。

「はーい！！　織斑くんが良いと思います！」

一人のが生徒が大きな声でそう言った。
それを皮切りに、他の生徒も口々に一夏を推し始めた。
「おっ、俺！？」
「ナイスアイディア！」
「そーね　せっかくだしね」
「私もそれがいいと思います」
好き勝手に話が進んでいくのを拙いと思いどうにか反論しようとするが
「ちょっと待った！　俺そんなｎ「自薦他薦は問わない
他に候補者はいないか？
無投票当選になるぞ？」」
「い、いやでもっ！？」
「ちなみに他薦されたものに拒否権などない　選ばれた以上は覚悟をしろよ」
「いやだからっ！！」
全く聞く耳を持たれない一夏。
そんな中、ただ一人だけその提案に異議を唱える人物がいた。

「納得できませんわ！！」

立ち上がり声を上げたお嬢様風の女子生徒の方をチラリと見る一夏。

「そのような選出は認められません！
大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！
ただえさえ男の教師に師事を受けることでさえ屈辱なのに、このセシリア・オルコットにそれ以上に屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

尊大な物言いで立ち上がり、ハッキリとした言葉で拒否を示すセシリア。

あまりの大声に、寝ている者は慌てて頭を上げ、周りの生徒達は一斉にセシリアを見つめている。

「実力から行けば、わたくしがクラス代表になるのは必然です！」

尚も喚くように口を開いているセシリアを眺め退いている一夏。

「（正直、この手合いは苦手だ）」

今の世の中は、ＩＳのせいで女性はかなり優遇されている。

優遇どころか、最早女＝偉いの構図にまでなっている。

一夏の目の前の少女も、そう言ういかにも現代の女子といった感じの生徒である。

「（まぁ俺としては、クラス代表とやらを引き受けてくれるというなら嬉しい限りだ）」

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき　それはわたくしですわ！」

未だに喋っているセシリア。

「何せわたくし、入試で唯一教官を倒した、エリート中のエリートですから」

自慢げに語るセシリア。

「？」

「イギリス代表候補生でもあるわたくし以上に、相応しい人間はいないはずですわ」

「入試ってあれか？　ＩＳ動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「俺も倒したぞ教官」

「なっ！！」

一夏の予想外の言葉に、セシリアは驚く。

「あなた！　あなたも教官を倒したって言うのですか！？」

「えーと　落ち着けよう、な？」

授業中だぞとセシリアをたしなめる一夏。

「これが落ち着いていられますか！？」

今にも噛みつきそうな勢いで一夏の前にでるセシリア。

「わざわざこんな島国にまで来たうえに、極東の猿と比べられるなんて…　このような屈辱　耐えられませんわ！！」

ぐぐぐと手を握り、悔しそうに歯噛みをするセシリア。

その言葉を聞いた一夏は、黙っていられなかった。

「イギリスだって島国だし大したお国に自慢ないだろ」

「なっ！？」

一夏の皮肉に驚愕し、言葉を失うセシリア。

「あっ　あっ　あなたねぇ！？　私の祖国を侮辱しますの！！」

ザワザワとざわめき立つ教室内。

セシリアの声も次第に大きくなってゆく。

「謝りなさい！　今なら泣いて謝れば許してあげなくもなくてよ」

「いやだね　先に言ってきたのはそっちだし　だいたい、その人を見下した態度が気に入らないんだよ！」

「キー！　なんて男ですの！！　わたくしの深い温情を蔑ろにするだなんて、もう許しませんわ！！」

バンッと一夏の机を叩くセシリア。周りの生徒達は、その光景を見て、静まり返る。

「決闘ですわ」

セシリアは座っている一夏に静かな口調で言い放つ。

「いいぜ　やるならやろう　四の五の言うより分かりやすいし」

こちらも、下から睨みつけるようにセシリアを見ながら言う。

こんな一触即発のこの二人を、止めた人物がいた。

「おち「いたっ」つけ「った」馬鹿ども」

今まで沈黙を保っていた千冬が手に持っていた名簿で二人の頭を叩き、争いを収めた。

「とにかく　話はまとまったな」

小さく息を吐きそう告げる千冬。

「勝負は、一週間後の月曜　放課後、第三アリーナで行う　それぞれ用意をしておくように」

「はい！！」

「…」

「…」

千冬の話の間も睨み続ける両者。

「では、授業にはいる　先ずは接近戦用の武器からだが…」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「うーむ」

人気のない教室で、一夏は一人教科書とにらめっこをしていた。

「（ISのことなにも知らないから、とりあえず勉強しようと思ったが…意味の分からん単語ばかりだな）」

ペラペラとページを捲りながら、教科書を見つめる一夏。

「（誰かに教えてもらわないとどうにもなりそうにないな――）」

そんな考えをしていると、ガラッと教室のドアが開き、真耶が入ってきた。

「よかった　織斑くん、まだ教室にいたんですね」

「あ　山田先生」

教室に入ってきた真耶はどうやら一夏に用事があるようで一夏を探していたようだ。

「えっとですね　寮の部屋が決まりました」

「え？」

そう言いながら一夏にある物を渡す。

「確か一週間は自宅から通学するって聞いてましたけど」

そう言いながら、手の平の鍵を見つめる一夏。

「事情が事情なのである方が引き受けてくれたみたいですよ」

一夏の疑問に答える真耶。

「でも荷物とかあるんで一度家に帰らないと…」

「あっ　それなら」

「それなら私が手配してやった」

何かを言い掛けた真耶の後ろから更に声がかけられた。

「着替えと携帯の充電器があれば十分だろう　ありがたく思え」

一夏の方を見ずそう言い放った千冬。

「はぁ…どうもありがとうございます」

千冬のなんとも尊大な物言いに一夏はそう答えるしかなく、摩耶は困ったように笑うしかなかった。

～～～

出てきたのは腰に一枚タオルを巻いただけの男シュウジ・クロスであった。

先程までシャワーを浴びていたのか、髪は解かれ濡れており、適度に引き締められたら肢体は水滴を垂らしていた。

「…！？」

「ん　どうした？」

不思議そうな顔で近づいてくるシュウジ。

「ぎ、ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁ！！」

あまりの出来事に物凄い悲鳴を上げた一夏。

その晩一夏の悲鳴は、シュウジに物理的に止められるまで、建物内を木霊するのであった。

～～～

クラス代表決定戦？の前に（後書き）

箒「何だろう　この何かが叩きおられた感覚は・・　嬉しいような、残念なような・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7006y/

機動武闘伝Ｇガンダム×ＩＳ（仮）

2011年11月28日03時56分発行